

## 梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)

阿毘達磨集論研究会

研究会代表者	那須良彦 (社会福祉法人金剛樹心会理事長)	
研究会メンバー	加納和雄 (駒沢大学講師)	李学竹 (中国蔵学研究中心宗教研究所教授)
	吉田 哲 (龍谷大学准教授)	松下俊英 (大谷大学非常勤講師)
	早島 慧 (龍谷大学講師)	横山 剛 (国際仏教学大学院大学特任研究員)
	高務祐輝 (京都大学非常勤講師)	間中 充 (龍谷大学大学院研究生)
	吹田隆徳 (佛教大学大学院生)	田中裕成 (佛教大学大学院生)
	奥野自然 (龍谷大学大学院生)	

### はじめに

本稿は、前稿(阿毘達磨集論研究会 [2015])の続編であり、『阿毘達磨集論』とその注釈『阿毘達磨集論釈』の梵文テキストを再制定し、その和訳を試みるものである。本書は、和文完訳が未刊行である点、および、これまで失われたと考えられてきた『阿毘達磨集論』梵本の欠損部の存在が新たに確認された点、主にこの二点を理由に、その梵本再校訂と和訳を目指す。

第二点については、李学竹が『阿毘達磨雜集論』(以下『雜集論』と略)の新出梵本の存在を確認したことに大きく依っている。そこには『阿毘達磨集論』とその注釈のほぼ全文が含まれているからである。なお、『雜集論』の冒頭部には、独自の文言(帰敬文とその釈文)が存在するため、当該箇所については別途、テキストと和訳を発表した(阿毘達磨集論研究会 [2016])。

本稿に収録する部分は、第一篇「本事分」の第一章「三法」中の「建立」における、「受蘊建立」から「行蘊建立」の半ばまでである。「行蘊建立」は、心所法を列举し、それぞれを「特徴」(lakṣaṇa)と「作用」(karman)の二点から定義してゆく。本稿が収めるのは、善心所の終わりに相当する「不害」(avihiṃsā)の定義までの箇所である。

研究会では、代表者である那須良彦が下訳と注を準備し、加納和雄をはじめとする班員がそれを検討するという仕方で作業を進めた。『雜集論』などの梵文原典の制定は、李学竹の全面的な協力によりなされた。

## 校訂と訳について

本稿で提示する、『阿毘達磨集論』の梵文校訂テキスト（暫定版）は、同梵文写本第 2～3 葉に相当する。このうち第 2 葉は同梵文写本に欠損しているため、安慧揉と伝えられる『雑集論』の梵文写本から取りだし (Li & Kano [2014])、そのテキストを提示した (中国蔵学研究中心に影印の紙焼きが所蔵され、原本はノルブリンカ蔵)。プラダンによる還梵テキストは参照するに留めた。そして、『阿毘達磨集論釈』は、タティアの刊本およびその原本たる梵文写本 (写本影印 Göttingen Xc 14/23, 14/24 を使用) と、『雑集論』の梵文写本から回収される梵文 (Li [2016] 所掲梵本翻刻) とを対校した校訂テキストを提示した。

本稿の校訂テキストにおいて、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。『阿毘達磨集論釈』において太字で示した箇所は、『阿毘達磨集論』の本文を指す。

訳語にかんして、個別の法の名称は術語 (テクニカルターム) として理解して伝統的な漢訳 (主に玄奘の訳語) を充て、それ以外は、現代表現 (とくに和語) を用いた。そして必要に応じて、現代表現に対応する伝統的漢訳表現を丸括弧で補った。

本稿で提示するテキストには諸法の定義が列挙され、それぞれの定義にはアビダルマや唯識の諸文献において各々対応する箇所が存在する。本来ならばその対応箇所を逐一報告する必要があるが、その作業はすでに『瑜伽行派の五位百法』をはじめとするパウツダ・コーシャシリーズにおいて網羅的になされている。そのため、本稿においては、作業の重複を避け、パウツダ・コーシャの該当箇所への言及によって、それに代えた。なお、『五蘊論』安慧釈 (PSkV) の梵文については、『瑜伽行派の五位百法』以後に出版されたため、該当箇所のみを適宜示す。

## 凡例

本稿では梵文テキストと和訳を見開きで提示する。提示する梵文テキスト並びにその中で使用した記号は、Li & Kano [2014]、Li [2015] [2016] の提示する校訂テキストに従う。三角△は、梵文写本における改行位置を示す。

## 科段

- 1.1.5.1.2 受蘊の設定
- 1.1.5.1.3 想蘊の設定
- 1.1.5.1.4 行蘊の設定
  - 1.1.5.1.4.1 思をはじめとする心所法（受と想を除く）
    - 1.1.5.1.4.1.1 思
    - 1.1.5.1.4.1.2 作意
    - 1.1.5.1.4.1.3 触
    - 1.1.5.1.4.1.4 欲
    - 1.1.5.1.4.1.5 勝解
    - 1.1.5.1.4.1.6 念
    - 1.1.5.1.4.1.7 三摩地
    - 1.1.5.1.4.1.8 慧
    - 1.1.5.1.4.1.9 信
    - 1.1.5.1.4.1.10-13 慚・愧・無貪・無瞋
    - 1.1.5.1.4.1.14 無痴
    - 1.1.5.1.4.1.15 勤
    - 1.1.5.1.4.1.16 軽安
    - 1.1.5.1.4.1.17 不放逸
    - 1.1.5.1.4.1.18 捨
    - 1.1.5.1.4.1.19 不害

## 1.1.5.1.2 受蘊の設定

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 8r3-v2 (Li & Kano [2014: 56.36-57.8] , Li [2015: 282.15-26] ) , Cf. 早島 34.

vedanāskandhavyavasthānaṃ katamat. ṣaḍ vedanākāyāḥ. cakṣusṣaṃsparśajā vedanā  
 sukhāpi duḥkhāpi, aduḥkhāsukhāpi. śrotraghrāṇajihvākāyamaṇḥsaṃsparśajā vedanā  
 sukhāpi duḥkhāpi, aduḥkhāsukhāpi. sukhāpi kāyikī duḥkhāpi, aduḥkhāsukhāpi kāyikī.  
 sukhāpi caitasikī duḥkhāpi, aduḥkhāsukhā caitasikī. sukhāpi sāmīṣā duḥkhāpi, aduḥkhā-  
 sukhāpi sāmīṣā. sukhāpi nirāmiṣā duḥkhāpi, aduḥkhāsukhā, nirāmiṣā. sukhāpi  
 gardhāsritā duḥkhāpi, aduḥkhāsukhā, gardhāsritā. sukhāpi naiṣkramyāsritā duḥkhāpi,  
 aduḥkhāsukhā naiṣkramyāsritā.

kāyikī katamā. pañcavijñānakāyasaṃprayuktā.  
 caitasikī katamā. manovijñānakāyasaṃprayuktā.  
 sāmīṣā katamā. ātmabhāvatṛṣṇāsaṃprayuktā.  
 nirāmiṣā katamā. tattṛṣṇāviprayuktā.  
 gardhāsritā katamā. pañcakāmagauṇikatṛṣṇāsaṃprayuktā.  
 naiṣkramyāsritā katamā. tadviprayuktā.

【ASBh】 ASBh-Ms 5r3-5 (Tatia 4.7-10) , ASVy-Ms 8v2-4 (Li [2015: 282.27-31] ) , Cf. 早島 35.

vedanāskandhavyavasthānaṃ āśrayataḥ svabhāvata āśrayasaṃkalanataḥ saṃkleśa-  
 vyavadānataś ca.

tatra rūpyāśrayasaṃkalanataḥ<sup>(1)</sup> kāyikīvedanāvyavasthānaṃ, arūpyāśrayasaṃkalanataś  
 caitasikīvedanāvyavasthānaṃ.<sup>(2)</sup> saṃkleśataḥ sāmīṣādīnāṃ, vyavadānato nirāmiṣādīnāṃ  
 vyavasthānaṃ veditavyaṃ. **tattṛṣṇāviprayukteti**<sup>(3)</sup> viṣamyuktā viṣamyogyānukūlā ca  
 veditavyā.

(1) rūpyāśraya-] ASVy-Ms, rūpāśraya- ASBh-Ms.

(2) caitasi-] ASVy-Ms, caitasa- ASBh-Ms.

(3) -viprayukteti] ASVy-Ms, -viyukteti ASBh-Ms.

## 1.1.5.1.2 受蘊の設定

【問】受蘊を設定(建立)するものは何か。【答】六つの受のあつまり(六受身)である。〔それは以下の四通りである。〕①眼の接触(根・境・識の和合)によって生じる楽受・苦〔受〕・不苦不楽〔受〕、耳・鼻・舌・身・意の接触によって生じる楽受・苦〔受〕・不苦不楽〔受という六つ〕である。〔または、〕②楽なる身〔受〕、苦〔なる身受〕、不苦不楽なる身〔受〕、楽なる心受、苦〔なる心受〕、不苦不楽なる心〔受という六つ〕である。〔または、〕③渴望(āmiṣa)を伴った楽〔受〕、〔渴望を伴った〕苦〔受〕、渴望を伴った不苦不楽〔受〕、渴望を伴わない楽〔受〕、〔渴望を伴わない〕苦〔受〕、渴望を伴わない不苦不楽〔受という六つ〕である。〔または、〕④貪著(gardha)に依る楽受、〔貪著に依る〕苦〔受〕、貪著に依る不苦不楽〔受〕、遠離に依る楽〔受〕、〔遠離に依る〕苦〔受〕、遠離に依る不苦不楽〔受という六つ〕である。

②【問】身〔受〕とは何か。【答】五つの識のあつまり(五識身)と相応した〔受〕である。

【問】心〔受〕とは何か。【答】意識のあつまり(意識身)と相応した〔受〕である。

③【問】渴望を伴った〔受〕とは何か。【答】自分自身(ātmabhāva)に対する渴愛と相応した〔受〕である。

【問】渴望を伴わない〔受〕とは何か。【答】それ(自分自身)に対する渴愛と相応しない〔受〕である。

④【問】貪著に依る〔受〕とは何か。【答】五つの感覚的欲望の対象(五妙欲)に対する渴愛と相応した〔受〕である。

【問】遠離に依る〔受〕とは何か。【答】そ〔のような渴愛〕と相応しない〔受〕である<sup>(4)</sup>。

①所依の点から、①-④自性の点から、②所依をまとめ合わせる(āśrayasaṃkalana)点から、③雑染と浄化の点から、受蘊を設定(建立)する。

そのうち、②有色なる所依をまとめ合わせる点から、身受を設定する。無色なる所依をまとめ合わせる点から、心受を設定し、③雑染の点から、渴望を伴った〔楽受〕などを〔設定し〕、浄化の点から、渴望を伴わない〔楽受〕などを設定する、と理解されるべきである。「それ(自分自身)に対する渴愛と相応しない〔受〕」とは、繫縛を離れた(離繫の)〔受〕と、離繫に随順した〔受〕であると理解されるべきである。

<sup>(4)</sup> その他論書の受の定義は、BK-I 51-52、BK-II 30-33、BK-III 61-67、BK-IV 62-73、BK-V 16-17、PSkV 24-29 参照。

## 1.1.5.1.3 想蘊の設定

【AS】 AS-Ms 3r1-2 (第2葉は欠損, Gokhale 15.21-28), ASVy-Ms 8v4-9r2 (Li & Kano [2014: 57.10-11], Li [2016: 218.13-24]), Cf. 早島 36.

Vy 8v5 samjñāskandhavyavasthānaṃ katamat. ṣaṭ samjñākāyāḥ. cakṣuḥsaṃsparśajā samjñā,  
AS 3r1 śrotagrāṇajihvākāyamaṇḥsaṃsparśajā samjñā. yayā sanimittam api samjñānāti,  
animittam api,<sup>(5)</sup> parittam api, mahadgatam api, apramāṇam api, nāsti kiṃcid ity  
Vy 8v6 ākiṃcanyāyatanam<sup>(6)</sup> api samjñānāti.

sanimittasamjñā katamā. avyavahāraśālyānimittadhātusamāpannasya bhavāgra-  
samāpannasya ca samjñāṃ<sup>(7)</sup> sthāpayitvā yāvad anyā samjñā.

animittasamjñā katamā. yā sthāpitā samjñā.

parittasamjñā<sup>(8)</sup> katamā. yayā kāmadhātuṃ samjñānāti.

mahadgatasamjñā<sup>(9)</sup> katamā. yayā rūpadhātuṃ samjñānāti.

Vy 9r2 apramāṇasamjñā katamā. yayā ākāśānantyāyatanam vijñānānantyāyatanam ca  
samjñānāti.

akiṃcanasamjñā<sup>(10)</sup> katamā. yayā ākiṃcanyāyatanam samjñānāti.

【ASBh】 ASBh-Ms 5r5-v3 (Tatia 4.11-17), ASVy-Ms 9r2-5 (Li [2016: 218.25-30]), Cf. 早島 37.

Bh 5v1 avyavahāraśālyāśikṣitabhāṣatayā rūpe samjñā bhavati na tu rūpaṃ iti. tasmād  
Vy 9r3 **animittasamjñety** ucyate.<sup>(11)</sup> **animittadhātusamāpannasya** rūpādisarvanimittāpagate  
'nimitte nirvāṇe samjñānimittasamjñā. **bhavāgrasamāpannasyāpaṭutvenālaṃbanā-**  
Bh 5v2 **nimittikaraṇād animittasamjñā.**  
Vy 9r4

**parittah** kāmadhātuḥ, nikṛṣṭatvāt.

Bh 5v3 **mahadgato** rūpadhātuḥ, tata utkrṣṭatvāt.<sup>(12)</sup>

Vy 9r5 **apramāṇe** ākāśavijñānānantyāyatane, aparyantatvāt.<sup>(13)</sup> tasmāt tadālaṃbanāḥ samjñāḥ  
parittādisamjñā veditavyāḥ.

<sup>(5)</sup> animittam api] AS-Ms, animittam api samjñānāti animittam api ASVy-Ms.

<sup>(6)</sup> ākiṃcanyā-] em., ākiṃcinyā- AS-Ms, ASVy-Ms.

<sup>(7)</sup> samjñāṃ] AS-Ms, samjñāḥ ASVy-Ms.

<sup>(8)</sup> parittasamjñā] ASVy-Ms, parittā samjñā AS-Ms (unclear).

<sup>(9)</sup> mahadgatasamjñā] ASVy-Ms, mahadgatā samjñā AS-Ms.

<sup>(10)</sup> akiṃcanasamjñā] AS-Ms, ākiṃcanyāyatanasamjñā ASVy-Ms.

<sup>(11)</sup> animittasamjñety ucyate] ASBh-Ms, animittasamjñocyate ASVy-Ms.

<sup>(12)</sup> tata utkrṣṭatvāt] ASBh-Ms, tadutkrṣṭatvāt ASVy-Ms.

<sup>(13)</sup> aparyantatvāt] ASBh-Ms, 'paryanṭhatvāt (sic) ASVy-Ms.

## 1.1.5.1.3 想蘊の設定

【問】想蘊を設定するものは何か。【答】六つの想のあつまり（六想身）である。眼の接触によって生じる想、耳・鼻・舌・身・意の接触によって生じる想〔という六つ〕である。〔または、〕有相なるものを表象し、無相なるものを〔表象し〕、劣小なるもの（paritta）を〔表象し〕、勝大なるもの（mahadgata）を〔表象し〕、無量なるものを〔表象し〕、「いかなるものも存在しない」という無所有処を表象するもの（yayā）である。

【問】有相なるものに対する想とは何か。【答】言語表現に未熟な者、無相界（無想定）に入定している者、有頂（滅尽定）に入定している者の想を除外した、あらん限りの他の想である。

【問】無相なるものに対する想とは何か。【答】それは〔先に〕除外された〔三つの〕想である。

【問】劣小なるものに対する想とは何か。【答】欲界を表象するものである。

【問】勝大なるものに対する想とは何か。【答】色界を表象するものである。

【問】無量なるものに対する想とは何か。【答】空無辺処と識無辺処を表象するものである。

【問】無所有なるものに対する想とは何か。【答】無所有処を表象するものである<sup>(4)</sup>。

「言語表現に未熟な者（avyavahāraśāla）<sup>(5)</sup>」は、いまだ言葉を習得していないので、色に対する想は生ずるが、「色である」と〔の想は生じ〕ない。それゆえに「無相なるものに対する想」と呼ばれる。「無相界（無想定）に入定している者にある」、色などの一切の相を離れた無相なる涅槃に対する想が、「無相なるものに対する想」〔と呼ばれる〕。「有頂に入定している者」は不鮮明なものとして、所縁を無相なるものにするから、〔彼の想は〕「無相なるものに対する想」〔と呼ばれる〕。

「劣小なもの」とは、欲界である。低級なものであるからである。

「勝大なもの」とは、色界である。それより上級なものであるからである。

「無量なもの」とは、空〔無辺処〕と識無辺処との両者である。無辺であるからである。それゆえ、それら（欲界・色界・二無辺処）を所縁とする諸想は、〔順に〕劣小なものなどに対する想であると理解されるべきである。

<sup>(4)</sup> その他論書の想の定義は、BK-I 53-54、BK-II 34-36、BK-III 68-71、BK-IV 74-81、BK-V 18-19、PSkV 29-31 参照。

<sup>(5)</sup> 言語を習得していない赤子などを指すものと考えられる。

## 1.1.5.1.4 行蘊の設定 (総説)

【AS】 AS-Ms 3r2–3 (Gokhale 15.28–31) , ASVy-Ms 9r5–v1 (Li [2016: 218.31–219.2]) , Cf. 早島 36.

AS 3r3 saṃskāraskandhavyavasthānaṃ katamat. ṣaṭ cetanākāyāḥ. cakṣuḥsaṃsparśajā cetanā,  
Vy 9r6 śrotagrahrāṇajihvākāyamaṇaḥsaṃsparśajā cetanā. yayā kuśalatvāya cetayate, saṃkleśāya  
Vy 9v1 cetayate, avasthābhedāya cetayate. itīyaṃ cetanā vedanāṃ saṃjñāṃ ca sthāpayitvā  
tadanye caitasikā dharmās citta<sub>△</sub>viprayuktās ca saṃskārāḥ saṃskāraskandha ity ucyate.

【ASBh】 ASBh-Ms 5v4–6r1 (Tatia 4.18–22) , ASVy-Ms 9v1–3 (Li [2016: 219.3–7]) , Cf. 早島 37.

Bh 5v4 vedanāsaṃjñāvarjyānāṃ sarveṣāṃ caitasikānāṃ citta<sub>△</sub>viprayuktānāṃ ca saṃskāra-  
Bh 5v5 skandhalakṣaṇatve cetanāmātrasyaiva tannirdeṣe grahaṇaṃ tatpūrvakatvād itareṣāṃ iti  
Vy 9v2 kāraṇatvajñāpanārtham<sup>(6)</sup> āha yayā kuśalatvāya cetayata ityevamādi. tatra kuśalā  
Bh 6r1 vakṣyamāṇāḥ śraddhādayaḥ. saṃkleśā rāgādayaḥ kleśopakleśāḥ. avasthābhedās<sup>(7)</sup>  
Vy 9v3 cetanāpreritasamskārāvasthāsu prajñaptāḥ citta<sub>△</sub>viprayuktāḥ saṃskārāḥ.

【AS】 AS-Ms 3r3–5 (Gokhale 15.31–35) , ASVy-Ms 9v3–6 (Li [2016: 219.8–16]) , Cf. 早島 40.

AS 3r4 te punaḥ katame. manaskāraḥ sparśaḥ chando 'dhimokṣaḥ smrṭiḥ samādhiḥ  
Vy 9v4 prajñā śraddhā hrīr apatrāpyam alobho 'dveṣo 'moho vīryaṃ praśrabdhir apramāda  
Vy 9v5 upekṣā 'vihimsā rāgaḥ pratigho māno 'vidyā vicikitsā satkāyadrṣṭir antagrāhadrṣṭir  
AS 3r5 drṣṭiparāmarśaḥ śīlavrataparāmarśo mithyādrṣṭiḥ krodha upanāho mraḥṣaḥ pradāśa  
Vy 9v6 īrṣyā mātsaryaṃ māyā śāṭhyaṃ mado vihiṃsā āhrīkyam anapatrāpyaṃ styānam  
AS 3r5 auddhatyaṃ āśraddhyaṃ kausīdyaṃ pramādo muṣitasmrṭitāsaṃprajanyaṃ vikṣepo  
Vy 9v6 middhaṃ kaukṛtyaṃ vitarko vicāraś ca.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r1–2 (Tatia 4.23) , ASVy-Ms 9v6–10r1 (Li [2016: 219.17]) , Cf. 早島 41.

Bh 6r2, Vy 10r1 cetanādīnāṃ caitasikānāṃ lakṣaṇataḥ karmataś ca nirdeṣo veditavyaḥ.

<sup>(6)</sup> kāraṇatva-] ASBh-Ms, kāraṇa- ASVy-Ms.

<sup>(7)</sup> avasthābhedās] em. (Tib.: gnas skabs kyi dbye ba ni, Ch.: 分位差別者), avasthābhedataś ASBh-Ms ASVy-Ms.



## 1.1.5.1.4 行蘊の設定(総説)

【問】行蘊を設定するものは何か。【答】六つの思のあつまり(六思身)である。〔すなわち〕眼の接触(根・境・識の和合<sup>18)</sup>)によって生じる思、耳・鼻・舌・身・意の接触によって生じる思〔という六つ〕である。〔それら六つは、〕善性を意思させ、雑染を意思させ、状態についての区別(avasthābheda, 分位差別<sup>19)</sup>)を意思させるもの(yayā)である。以上のようなこの思と、受・想を除外したそれ以外の心所法と、心不相応行とが「行蘊」と呼ばれる。

受・想を除外した一切の心所と心不相応〔行〕も行蘊の特徴を持つのに、ただ思のみがそれ(行蘊)の解説に対して用いられるのは、別のもの(思以外の行蘊に摂められる諸法)が、それ(思)を前提とするからである。以上のように〔思が〕原因であることを示すために、「善性を意思させるもの(yayā)」云々と言う。その中で、「善」とは、これから説明する信などである。「雑染」とは、貪などの煩惱と随煩惱である。「状態についての区別」とは<sup>20)</sup>、思によって引き起こされた諸行の状態(avasthā)に対して名付けられた心不相応行である。

【問】では、それら(受・想・思以外の心所法)は何か。【答】作意・触(以上、受・想・思と合わせて、五遍行)、欲・勝解・念・三摩地・慧(以上、五別境)、信・慚・愧・無貪・無瞋・無癡・勤・輕安・不放逸・捨・不害(以上、十一善)、貪・瞋・慢・無明・疑・有身見・辺執見・見取・戒禁取・邪見(以上、十煩惱)、忿・恨・覆・惱・嫉・慳・誑・諂・諂・害・無慚・無愧・憍沈・掉挙・不信・懈怠・放逸・忘念・不正知・散乱(以上、二十随煩惱)、睡眠・悪作・尋・伺(以上、四不定)である。

思などの心所法の解説は、特徴の点と作用の点から理解されるべきである。

<sup>18)</sup> 有部の教理に従って眼の接触をこのように理解した。ただし、他の解釈の可能性もあり、問題が残る。これについては、本稿脚注 27 参照。

<sup>19)</sup> 特定の状態としての心不相応行を指すものと考えられる。

<sup>20)</sup> avasthābhedaś (状態についての区別)は、文脈および漢訳とチベット語訳に基づく訂正である。いっぽう、梵文写本は avasthābhedatah と読み、これを採用すると以下の文意となる。「状態についての区別に応じて、思によって引き起こされた諸行の状態に対して名付けられた心不相応行である」。

## 1.1.5.1.4.1 思をはじめとする心所法（受と想を除く）

## 1.1.5.1.4.1.1 思

【AS】 AS-Ms 3r5 (Gokhale 15.36) , ASVy-Ms 10r1 (Li [2016: 219.18–19]) , Cf. 早島 40.

cetanā katamā. cittābhisamkāro manaskarma. kuśalākuśalāvyākṛteṣu cittapreraṇakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r2–3 (Tatia 4.24–5.1) , ASVy-Ms 10r1–2 (Li [2016: 219.20–22]) , Cf. 早島 41.

tatra cetanāyāḥ **cittābhisamkāro manaskarmeti** lakṣaṇanirdeśaḥ. **kuśalākuśalāvyākṛteṣu cittapreraṇakarmiketi** karmanirdeśaḥ. tathā hi yathābhisamkāraṃ kuśalādiṣu dharmeṣu cittasya pravṛttir bhavatīti.

## 1.1.5.1.4.1.2 作意

【AS】 AS-Ms 3r5–3r6 (Gokhale 15.37–16.1) , ASVy-Ms 10r2–3 (Li [2016: 219.23]) , Cf. 早島 40.

manaskāraḥ katamaḥ. cetasa ābhogaḥ. ālambane cittadhāraṇakarmaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r3–4 (Tatia 5.1–3) , ASVy-Ms 10r3 (Li [2016: 219.24–25]) , Cf. 早島 41.

ālambane **cittadhāraṇaṃ** tatraiva punaḥpunarāvarjanaṃ veditavyam. ata eva samādhilābhī manaskāralābhī<sup>(2)</sup> ucyate.

<sup>(2)</sup> manaskāra-] ASVy-Ms (Tib.: yid la byed pa, Ch.: 作意), manasamkāra- ASBh-Ms.

## 1.1.5.1.4.1 思をはじめとする心所法（受と想を除く）

## 1.1.5.1.4.1.1 思

【問】思とは何か。【答】心の発動（造作）であって、意業である。〔そして、〕善・不善・無記のものに対して、心を駆り立てる作用をもつ<sup>22)</sup>。

そのうち、「心の発動（造作）であって、意業である」とは、特徴の点からの思の解説である。「善・不善・無記のものに対して、心を駆り立てる作用をもつ」とは、作用の点からの解説である。すなわち、〔心の〕発動に応じ、善などの諸法に対して、心がはたらくことになる、ということである。

## 1.1.5.1.4.1.2 作意

【問】作意とは何か。【答】心を構えることである。〔そして、〕所縁に向けて〔その〕心を維持する作用をもつ<sup>23)</sup>。

「所縁に向けて心を維持する」とは、同じその〔所縁〕に対して何度も〔心を〕向けること、と理解されるべきである。まさにこのゆえに、三摩地を獲得する者は、「作意を獲得する者」と呼ばれる。

<sup>22)</sup> 他論書の思の定義は、BK-I 55-56、BK-II 37-40、BK-III 72-74、BK-IV 82-85、BK-V 20-21、PSkV 35-36 参照。

<sup>23)</sup> 他論書の作意の定義は、BK-I 65-66、BK-II 24-26、BK-III 98-102、BK-IV 103-106、BK-V 12-13、PSkV 35 参照。

## 1.1.5.1.4.1.3 触

【AS】 AS-Ms 3r6 (Gokhale 15.38–16.1) , ASVy-Ms 10r3–4 (Li [2016: 219.26–27]) , Cf. 早島 40.  
 Vy 10r4 sparśaḥ katamaḥ. trikaṣaṃnipāta indriyavikāraparicchedaḥ. vedanāsaṃniśrayadāna-  
 karmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r4 (Tatia 5.3–4) , ASVy-Ms 10r4–5 (Li [2016: 219.28–220.1]) , Cf. 早島 41.

Vy 10r5 vijñānotpattāv indriyasya sukhādivedanotpattyanukūlo<sup>24)</sup> yo vikāras tadākāraḥ sparśo  
 veditavyaḥ.

## 1.1.5.1.4.1.4 欲

【AS】 AS-Ms 3r6 (Gokhale 16.1–2) , ASVy-Ms 10r5 (Li [2016: 220.2–3]) , Cf. 早島 42.

chandaḥ katamaḥ. īpsite vastuni tattadupasaṃhitā<sup>25)</sup> kartukāmatā. vīryārambha-  
 saṃniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r4–5 (Tatia 5.4–5) , ASVy-Ms 10r5–6 (Li [2016: 220.3–4]) , Cf. 早島 43.

Bh 6r5  
 Vy 10r6 **tattadupasaṃhitā kartukāmateti darśanaśravaṇādīsarvakriyechhāsaṃgrahārtham.**

<sup>24)</sup> sukhādi-] ASBh-Ms, sukhādī- ASVy-Ms.

<sup>25)</sup> -upasaṃhitā] AS-Ms ASVy-Ms, -upasaṃhatā Gokhale

## 1.1.5.1.4.1.3 触

【問】触とは何か。【答】三者（根・境・識）の和合において<sup>26)</sup>根の変異を〔楽などの三種類に〕仕分けするものである。〔そして、〕受によりどこを提供する作用をもつ<sup>27)</sup>。

識が生じるとき、根には、楽などの受の生起に順じた変異があるが、そのあり方をもつものが触であると理解されるべきである。

## 1.1.5.1.4.1.4 欲

【問】欲とは何か。【答】所望したものごとくにむけて、各々発せられた行動意欲である。〔そして、意欲を実行に移す〕努力（勤）を始めるための依り所を提供する作用をもつ<sup>28)</sup>。

「各々発せられた行動意欲」とは、見る聞くなどの<sup>29)</sup>あらゆる行いへの欲求を包含するために〔「各々」と述べられたの〕である。

<sup>26)</sup> AS-Ms (trikasannipāte) 並びに PSk における定義 (5.4: sparsaḥ katamaḥ. trisamavāye paricchedaḥ. Cf. PSkV 34.15–17, TrBh 20.5–7) を参考に、trikasannipāta を Loc. と理解した。ただし、YBh の用例を見れば (60.1–2: sparsaḥ katamaḥ. trikasannipātaḥ.)、「三者（根・境・識）の和合であり、根の変異を〔楽などの三種類に〕仕分けするものである。」と Nom. で理解する可能性も残る。なお、この問題に関連して、スティラマティによる触の解釈については、瀧川 [2008] を参照。

<sup>27)</sup> 他論書の触の定義は、BK-I 59–60、BK-II 27–29、BK-III 78–81、BK-IV 91–95、BK-V 14–15、PSkV 34–35 参照。

<sup>28)</sup> 他論書の欲の定義は、BK-I 57–58、BK-II 41–43、BK-III 75–77、BK-IV 86–90、BK-V 22–23、PSkV 36–37 参照。

<sup>29)</sup> 「見聞覚知」を指す。

## 1.1.5.1.4.1.5 勝解

【AS】 AS-Ms 3r6 (Gokhale 16.2–3) , ASVy-Ms 10r6 (Li [2016: 220.5–6]) , Cf. 早島 42.

adhimokṣaḥ katamaḥ. niścite vastuni yathāniścayaṃ dhāraṇā. asaṃhāryatākarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r5 (Tatia 5.5–6) , ASVy-Ms 10r6–v1 (Li [2016: 220.7–8]) , Cf. 早島 43.

**yathāniścayaṃ dhāraṇā** evam etan nānyathety adhimuktiḥ. <sup>△</sup>ata eva tatpradhāno  
nyaiḥ saṃhartuṃ na śakyate.

## 1.1.5.1.4.1.6 念

【AS】 AS-Ms 3r6–7 (Gokhale 16.3–4) , ASVy-Ms 10v1 (Li [2016: 220.9]) , Cf. 早島 42.

smṛtiḥ <sup>△</sup>katamā. saṃstute vastuni cetaso 'bhilapanam asaṃpramoṣaḥ.<sup>(30)</sup> avikṣepakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 6r5–v1 (Tatia 5.7–8) , ASVy-Ms 10v1–2 (Li [2016: 220.10–11]) , Cf. 早島 43.

**saṃstutaṃ <sup>△</sup>vastu** pūrvānubhūtaṃ veditavyam. **avikṣepakarmikatvaṃ** punaḥ  
<sup>△</sup>smṛter ālaṃbanābhilapane sati cittāvikṣepatām<sup>(30)</sup> upādāya.

<sup>(30)</sup> cetaso 'bhilapanam asaṃpramoṣaḥ] em., cetaso 'saṃpramoṣaḥ AS-Ms AS-Vy.

“saṃstute vastuni cetaso 'saṃpramoṣaḥ”という一文は、“saṃstute vastuni cetaso 'bhilapanam asaṃpramoṣaḥ”（「心に銘記して、忘れないこと」）と訂正して読むべきである。まず ASBh の smṛter ālaṃbanābhilapane sati という注釈は、cetaso 'bhilapanamに類する AS の文言を前提としている。それに加えて、漢訳および『顯揚論』（T [31] 481b11）の「念者。謂於申習境令心明記不忘爲體」も、やはり cetaso 'bhilapanam asaṃpramoṣaḥという読みをはっきりと示す。さらに、近接する文献の関連箇所でも、YBh 60.5–6: yat saṃstute vastuni tatra tatra tadanugābhilapanā, PSk 5.11–12: smṛtiḥ katamā. saṃstute vastuny asaṃpramoṣaś cetaso 'bhilapanatā, TrBh (Lévi) 25.30–26.5, (Buescher) 74.1–6: smṛtiḥ saṃstute vastuny asaṃpramoṣaś cetaso 'bhilapanatā となっており、上記の読みを補強する。付言すると、AS-Ms において cetasahの後に不要な分節記号が付いているのも、その元となった写本において cetasahの直後になんらかの語句の補いを指示する挿入記号が存在していた可能性を示唆する。これらを踏まえて上記のように校訂した。

ただし、ŚrBh には taccetaso 'saṃpramoṣaḥ (ŚrBh2 178.17)、AKVy には yadyogād ālaṃbanaṃ na mano vismarati. tac cābhilapatīva. (127.32–33)、AAA には saṃstute vastuni cetaso 'saṃpramoṣaḥ smṛtiḥ (198.22) という表現も見られる。

<sup>(30)</sup> cittāvikṣepatām] ASBh-Ms, avikṣepatām ASVy-Ms.

## 1.1.5.1.4.1.5 勝解

【問】勝解とは何か。【答】確定されたものごとを〔その〕確定の通りに〔信用して〕維持すること (dhāraṇa) である。〔そして、〕覆されない (asaṃhāryatā) という作用をもつ<sup>32)</sup>。

「確定の通りに〔信用して〕維持すること」とは「これはこうであって、別ではない」と信用 (adhimukti) することである。まさにこの故に、それ (勝解) を第一とする者が他者によって覆されることはありえない。

## 1.1.5.1.4.1.6 念

【問】念とは何か。【答】慣れ親しんだ (saṃstuta) ものごとを心に銘記し<sup>33)</sup>、かつ〔忘れて〕失わないこと (asaṃpramoṣa) である。〔そして、〕散乱させない作用をもつ<sup>34)</sup>。

「慣れ親しんだものごと」とは、以前に経験した〔ものごと〕であると理解されるべきである。さらに、「散乱させない作用をもつ」とは、念が所縁を銘記しているとき、心は散乱しないからである。

<sup>32)</sup> 他論書の勝解の定義は、BK-I 67-68、BK-II 44-46、BK-III 103-105、BK-IV 107-110、BK-V 24-25、PSkV 37 参照。

<sup>33)</sup> abhilapana の基本的な意味は、「喋ること」であるが、ここでは cetaso 'bhilapanam 「心で喋ること」という表現を、心内で言語化して記憶し、心に銘記するという意味で理解し、上記の様に訳した。

<sup>34)</sup> 他論書の念の定義は、BK-I 63-64、BK-II 47-49、BK-III 93-97、BK-IV 26-27、BK-V 26-27、PSkV 37-38 参照。

## 1.1.5.1.4.1.7 三摩地

【AS】 AS-Ms 3r7 (Gokhale 16.4) , ASVy-Ms 10v2 (Li [2016: 220.12–13]) , Cf. 早島 42.

samādhiḥ katamaḥ. upaparīkṣye vastuni cittasyaikāgratā. jñānasaṃniśrayadāna-  
karmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6v1–2 (Tatia 5.8–9) , ASVy-Ms 10v2–3 (Li [2016: 220.14–15]) , Cf. 早島 43.

**cittasyaikāgratā**vikṣepaḥ. **jñānasaṃniśrayadānaṃ** samāhitacittasya yathābhūta-  
jñānāt.

## 1.1.5.1.4.1.8 慧

【AS】 AS-Ms 3r7 (Gokhale 16.5–6) , ASVy-Ms 10v3–4 (Li [2016: 220.16–17]) , Cf. 早島 42.

prajñā katamā. upaparīkṣya eva vastuni dharmāṇāṃ pravīcayāḥ. saṃśayavyāvartana-  
karmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 6v2 (Tatia 5.9–10) , ASVy-Ms 10v4 (Li [2016: 220.18]) , Cf. 早島 43.

**saṃśayavyāvartanaṃ** prajñayā dharmān pravīcinvato niścayaḥ.



## 1.1.5.1.4.1.7 三摩地

【問】三摩地とは何か。【答】考察されるべき (upaparīkṣya) ものごとにむけて心が一点に集中すること (ekāgratā) である。〔そして、〕智によりどころを提供する作用をもつ<sup>(35)</sup>。

「心が一点に集中すること」とは、散乱しないことである。〔三摩地が〕「智によりどころを提供する」とは、心が入定している者は〔ものごとを〕ありのままに知るからである。

## 1.1.5.1.4.1.8 慧

【問】慧とは何か。【答】〔三摩地の場合と〕同じ考察されるべきものごとについて、諸法をえらびわけること (pravicaya) である。〔そして、〕疑いを取り除く作用をもつ<sup>(36)</sup>。

「疑いを取り除く」とは、諸法を慧によってえらびわける者は、確定を得るからである。

<sup>(35)</sup> 他論書の三摩地の定義は、BK-I 69–70、BK-II 50–52、BK-III 106–110、BK-IV 111–113、BK-V 28–29、PSkV 38 参照。

<sup>(36)</sup> 他論書の慧の定義は、BK-I 61–62、BK-II 53–55、BK-III 82–92、BK-IV 96–99、BK-V 30–32、PSkV 38–39 参照。また、慧の定義内容の詳細については、『仏教文化研究論集』18・19 合併号所収のパウダグコーシャ・プロジェクトにおける各氏の論文を参照。

## 1.1.5.1.4.1.9 信

【AS】 AS-Ms 3r7-v1 (Gokhale 16.7-8) , ASVy-Ms 10v4-5 (Li [2016: 220.19-20]) , Cf. 早島 44.

śraddhā katamā. astitvaguṇavattvaśakyatveṣv abhisampratyayaḥ prasādo 'bhilāṣaḥ.  
 chandasamṇisrayadānakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 6v2-3 (Tatia 5.10-12) , ASVy-Ms 10v5-6 (Li [2016: 220.21-22]) , Cf. 早島 45.

astitve 'bhisampratyayākārā śraddhā. guṇavattve<sup>(37)</sup> prasādākārā. śakyatve  
 'bhilāṣākārā, śakyam mayā prāptuṃ niṣpādayituṃ veti.

## 1.1.5.1.4.1.10-13 慚・愧・無貪・無瞋

【AS】 AS-Ms 3v1-2 (Gokhale 16.8-11) , ASVy-Ms 10v6-11r1 (Li [2016: 221.1-9]) , Cf. 早島 44.

hrīḥ katamā. svayam avadyena<sup>(38)</sup> lajjanā.<sup>(39)</sup> duścaritasamṇisrayadānakarmikā.  
 apatrāpyam katamat. parato 'vadyena lajjanā.<sup>(40)</sup> tatmakamakam eva.<sup>(41)</sup>

alobhaḥ katamaḥ. bhavē bhavopakaraṇeṣu vānāsaktiḥ. duścaritāpravṛttisamṇisraya-  
 dānakarmakaḥ.<sup>(42)</sup>

adveṣaḥ katamaḥ. sattveṣu duḥkhe duḥkhasthānīyeṣu ca dharmeṣv anāghātaḥ. duś-  
 caritāpravṛttisamṇisrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 6v3 (Tatia 5.12) , ASVy-Ms 欠, Cf. 早島 45.

hryādayaḥ sugamatvān na vibhajante.<sup>(43)</sup>

<sup>(37)</sup> guṇavattve] ASVy-Ms, guṇatve ASBh-Ms.

<sup>(38)</sup> avadyena] AS-Ms, evadyena ASVy-Ms.

<sup>(39)</sup> lajjanā] AS-Ms, lajjā ASVy-Ms.

<sup>(40)</sup> lajjanā] AS-Ms, lajjā ASVy-Ms.

<sup>(41)</sup> eva] AS-Ms, iti ca ASVy-Ms.

<sup>(42)</sup> duścaritāpravṛtti-] AS-Ms, duścarito 'pravṛtti- ASVy-Ms.

<sup>(43)</sup> hryādayaḥ sugamatvān na vibhajante] om. ASVy-Ms and ASVy-Tib.

## 1.1.5.1.4.1.9 信

【問】信とは何か。【答】実在性・有徳性・実現可能性に対する<sup>44)</sup>確信であり、〔心の〕清浄さ<sup>45)</sup>であり、願望である。〔そして、〕欲によりどころを提供する作用をもつ<sup>46)</sup>。

信は、〔対象<sup>47)</sup>に備わる〕実在性について確信するというあり方 (ākāra) を持ち、有徳性についての〔心の〕清浄さというあり方を持ち、「私は獲得することができる、あるいは、達成することができる〔できる〕と、実現可能性について願望するというあり方を持つものである。

## 1.1.5.1.4.1.10–13 慚・愧・無貪・無瞋

【問】慚とは何か。【答】自ら〔を省みて、自身の〕過失<sup>48)</sup>によって恥じることである。〔そして、〕悪行の抑制によりどころを提供する作用をもつ<sup>49)</sup>。

【問】愧とは何か。【答】他者を顧みて〔自身の〕過失によって恥じることである。〔そして、それは慚と〕同じくその作用をもつ<sup>50)</sup>。

【問】無貪とは何か。【答】生きることに対する、あるいは生きるための必需品に対して執着しないことである。〔そして、〕悪行をおこさないことによりどころを提供する作用をもつ<sup>51)</sup>。

【問】無瞋とは何か。【答】有情たち、苦、苦に相当する諸法<sup>52)</sup>に対して怒らないことである。〔そして、〕悪行をおこさないことによりどころを提供する作用をもつ<sup>53)</sup>。

慚などはわかりやすいから、解説しない。

<sup>44)</sup> *astitva, guṇavattva, śakyatva* という一連の語を用いた表現は、他の唯識・如来蔵系の諸文献にも見られる (高崎 [1964]、袴谷 [1992] 参照)。菅原 [2010: 275–285] では、YBh における「修所成地」(梵文未校訂) の用例を新たに指摘し、同氏の部分校訂と併せて提示する。この用例は、現在確認されている中で最も古いものである可能性が高く、重要と考えられる。ただし、その文脈は *śraddhā* を直接に定義するものでなく、また、実在性・有徳性・実現可能性を備えるものに関しても、道 (*mārga*) ならびにその果としての涅槃が説かれている。注意を要すると同時に興味深い点でもあろう。この他、瑜伽行派文献における *śraddhā* の現代訳語検討の試みとして、パウツダコーシャ・プロジェクトチーム [2014: 27–36] (第三章：高橋晃一「瑜伽行派文献の *śraddhā*」) も併せて参照されたい。

<sup>45)</sup> 疑念がなく澄みきっていることを意味する。前注の高橋論文参照。

<sup>46)</sup> 他論書の信の定義は、BK-I 71–72、BK-II 56–58、BK-III 111–115、BK-IV 114–118、PSkV 40–43 参照。また、信の定義内容の詳細については、パウツダコーシャ・プロジェクトチーム [2014] を参照。

<sup>47)</sup> 信の対象は一般的に、三宝、四諦、業果とされる。

<sup>48)</sup> *avadya* には「非難」の意味もあるが、AS の漢訳は「過惡」であり、AKBh では *doṣa*、PSkV では *pāpa* と言い換えられていることから、ここでは「過失」の意味で理解した。

<sup>49)</sup> 他論書の慚の定義は、BK-I 77–79、BK-II 62–64、BK-III 124–127、BK-IV 126–128、PSkV 43–44 参照。

<sup>50)</sup> 他論書の愧の定義は、BK-I 80–82、BK-II 65–67、BK-III 128–129、BK-IV 129–131、PSkV 44–45 参照。

<sup>51)</sup> 他論書の無貪の定義は、BK-I 83–84、BK-II 68–70、BK-IV 132–135、PSkV 45 参照。

<sup>52)</sup> 苦に相当する諸法とは、苦苦や行苦といった苦の類似法ではなく、本質的な苦である苦受をもたらす原因である有漏の有為法であろう。AKBh 55.13–15 (Cf. AKVy 129.8–16) 等で *sthānīya* は屢々 *nimitta* に置き換えられるが、ここでの訳「相当する」もそうした意味を排除せず、寧ろ包含しようとするものである。

<sup>53)</sup> 他論書の無瞋の定義は、BK-I 85–86、BK-II 71–73、BK-IV 136–139、PSkV 45–46 参照。

## 1.1.5.1.4.1.14 無痴

【AS】 AS-Ms 3v2 (Gokhale 16.11–12) , ASVy-Ms 11r1–2 (Li [2016: 221.8–9]) , Cf. 早島 44.

amohaḥ katamaḥ. vipākato vā āgamato vādhigamato vā jñānaṃ pratisaṃkhyā. duś-  
caritāpravṛttisaṃniśrayadānakarmakaḥ.<sup>(64)</sup>

【ASBh】 ASBh-Ms 6v3–4 (Tatia 5.13–14) , ASVy-Ms 11r2–3 (Li [2016: 221.10–11]) , Cf. 早島 45.

upapattiprātilambhikaṃ<sup>(65)</sup> śrutacintāmayam bhāvanāmayam ca yathākramaṃ vipākā-  
gamādhigamajñānaṃ<sup>(66)</sup> veditavyam. pratisaṃkhyā prajñā dhairyasahitā.<sup>(67)</sup>

## 1.1.5.1.4.1.15 勤

【AS】 AS-Ms 3v2–3 (Gokhale 16.12–14) , ASVy-Ms 11r3–4 (Li [2016: 221.12–14]) , Cf. 早島 46.

vīryaṃ katamat. cetaso<sup>(68)</sup> 'bhyutsāhaḥ saṃnāhe vā prayoge vālinatve vāvyāvṛttau  
vāsantuṣṭau vā. kuśalapakṣaparipūraṇapariniṣpādanakarmakam.<sup>(69)</sup>

【ASBh】 ASBh-Ms 6v4–7r1 (Tatia 5.14–18) , ASVy-Ms 11r4–6 (Li [2016: 221.15–17]) , Cf. 早島 47.

sthāmavān vīryavān utsāhī dṛḍhaparākramo 'nikṣiptadhuraḥ kuśaleṣu dharmeṣv  
ityevamādisūtrapadāni<sup>(60)</sup> yathākramaṃ saṃnāhādiṣv abhyutsāhavastuṣu yojay-  
itavyāni. paripūraṇaṃ yathā maulapraveśaḥ.<sup>(61)</sup> pariniṣpādanaṃ<sup>(62)</sup> tasyaiva  
suparikarmakṛtatvam.

<sup>(64)</sup> -dānakarmakaḥ] AS-Ms, -dāhāvakarmakaḥ ASVy-Ms.

<sup>(65)</sup> -prātilambhikaṃ] ASBh-Ms, -pratilambhikaṃ ASVy-Ms.

<sup>(66)</sup> -jñānaṃ] ASVy-Ms, -rūpaṃ ASBh-Ms. Cf. 『雑集論』(T [31] 697c1: 報教証智者), ASBh-Tib. (D5a6, P6b1: rnam par smin pa dang / lung dang / rtog pa'i shes par ...).

ただし、vipākagamādhigamarūpaṃ jñānaṃ という読みが存在した可能性もある。

<sup>(67)</sup> dhairyasahitā] ASVy-Ms, dhairyasamāhitā ASBh-Ms. Cf. PSkV 46.6: pratisaṃkhyā tu prajñāiva dhairyasahitā.

<sup>(68)</sup> cetaso] ASVy-Ms, kuśale cetaso AS-Ms. Cf. 『集論』(T [31] 664b14: 謂心勇悍), AS-Tib. (D49a1, P56a7: chog par mi 'dzin pa la sems mngon par spro ba ste /).

<sup>(69)</sup> -karmakam] ASVy-Ms, -karmakaḥ AS-Ms.

<sup>(60)</sup> ityevamādi-] ASBh-Ms, ity etāni- ASVy-Ms.

<sup>(61)</sup> maulapraveśaḥ] ASVy-Ms, maulaṃ praveśaḥ ASBh-Ms. Cf. PSkV 47.7.

<sup>(62)</sup> pariniṣpādanaṃ] ASVy-Ms, niṣpādanaṃ ASBh-Ms.

Vy 11r2

Bh 6v4  
Vy 11r3

Vy 11r4

AS 3v3

Bh 6v5  
Vy 11r5

Bh 7r1

Vy 11r6

## 1.1.5.1.4.1.14 無痴

【問】無痴とは何か。【答】異熟、聖教、あるいは証得にもとづく智 (jñāna) であり、決択知 (pratisamkhyā) である。〔そして、〕悪行をおこさないことによりどころを提供する作用をもつ<sup>63)</sup>。

「異熟、聖教、証得にもとづく智」とは、順次、先天的に得ている〔慧〕、聞と思から成る〔慧〕、修から成る〔慧〕であると理解されるべきである。決択知とは、勇敢さ (dhairya) を伴う慧である。

## 1.1.5.1.4.1.15 勤

【問】勤 (vīrya) とは何か。【答】心の勇ましき (abhyutsāha) であって、準備すること (被甲 samnāha)、あるいは修行 (prayoga)、あるいは卑屈でないこと (alīmatva)、退失しないこと (avyāvṛtti)、満足してしまわないこと (asantuṣṭi) に対する〔心の勇ましきである〕。〔そして、〕善行を満たして円かにする作用をもつ<sup>64)</sup>。

「勢いを持ち、精進を有し、勇猛で、堅固な勇気を持ち、諸々の善法について重荷を捨てない」云々等の經典<sup>65)</sup>中の語は、順次、準備すること (被甲) をはじめとする勇ましきの〔五つの〕事項に適用されるべきである<sup>66)</sup>。「満たす」とは、例えば、根本〔静慮〕に入ることである。「円かにする」とは、まさにそれを極めてよく修習することである。

<sup>63)</sup> 他論書の無痴の定義は、BK-II 74-76、PSkV 46 参照。

<sup>64)</sup> 他論書の勤の定義は、BK-I 73-74、BK-II 59-61、BK-III 116-118、BK-IV 119-121、PSkV 46-47 参照。

<sup>65)</sup> 長尾 [2009: 89 (n. 11)] に指摘されるように、この經典は ŚrBh<sub>1</sub> 270.7-8、BBh 203.19-22、MSA 115.1-2、『顯揚論』 T [31] 481c10-11 などに引用され、Avs 222.9 に同文が確認される。また、Lévi [1911: 199]、Lamotte [1938: 191-192] によって MN ii 95 などの類文が指摘されている。

<sup>66)</sup> MSA-XVI k. 68 等にも同様の対応関係が見られ、整理すると以下のようになる。

甲冑 samnāha — 勢力を持つ sthānavat

加行 prayoga — 勤を有する vīryavat

惰弱でないこと alīmatva — 勇猛である utsāhin

退失しないこと avyāvṛtti — 堅固な剛勇を持つ dṛdhaparākraman

満足しないこと asantuṣṭi — 重荷を捨てない nikṣiptadhura

## 1.1.5.1.4.1.16 軽安

【AS】 AS-Ms 3v3 (Gokhale 16.14–15) , ASVy-Ms 11r6 (Li [2016: 221.18–19]) , Cf. 早島 46.

praśrabdhiḥ katamā. kāyacittadauṣṭhulyānām pratipraśrabdheḥ<sup>(67)</sup> kāyacitta-  
karmaṇyatā. sarvāvaraṇaniṣkarṣaṇakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 7r1 (Tatia 5.17–18) , ASVy-Ms 11r6 (Li [2016: 221.20]) , Cf. 早島 47.

sarvāvaraṇaniṣkarṣaṇam tadvaśenāśrayaparivṛttito draṣṭavyam.

## 1.1.5.1.4.1.17 不放逸

【AS】 AS-Ms 3v3–4 (Gokhale 16.15–17) , ASVy-Ms 11v1 (Li [2016: 221.21–222.1]) , Cf. 早島 46.

Vy 11v1  
AS 3v4  
apramādaḥ katamaḥ. savīryakān alobhādveṣāmohān niśritya yā<sup>(68)</sup> kuśalānām  
dharmānām bhāvanā sāsraṇebhyaś ca dharmeḥbhyaś cittasyāraḥṣā.<sup>(69)</sup> sarva<sup>(70)</sup>-laukika-  
lokottarasampattiparipūraṇaniṣpādanakarmakaḥ.<sup>(71)</sup>

【ASBh】 ASBh-Ms 7r1–2 (Tatia 5.18–20) , ASVy-Ms 11v2 (Li [2016: 222.2–3]) , Cf. 早島 47.

Vy 11v2  
Bh 7r2  
sarvakuśalabhāvanāyā vīryādipūrvakatvāt teṣv apramādaprajñaptiḥ. sāsraṇā dharmā  
āsraṇā āsraṇasthānīyāś ca viṣayā iha veditavyāḥ.

<sup>(67)</sup> pratipraśrabdheḥ] AS-Ms, pratipraśrabdhiḥ ASVy-Ms.

<sup>(68)</sup> yā] AS-Ms, om. ASVy-Ms.

<sup>(69)</sup> cittasyāraḥṣā] ASVy-Ms, cittāraḥṣā AS-Ms.

<sup>(70)</sup> sarva-] ASVy-Ms, sa ca AS-Ms. Cf. 『集論』(T [31] 664b19: 一切世出世福爲業), AS-Tib. (D49a3–4, P56b2: 'jig rten pa dang 'jig rten las 'das pa'i phun sum tshogs pa thams cad yongs su rdzogs par byed pa dang /).

<sup>(71)</sup> -paripūraṇaniṣpādana-] AS-Ms, -paripūraṇa- ASVy-Ms.

## 1.1.5.1.4.1.16 軽安

【問】軽安とは何か。【答】身心の鈍重さ（鈍重）<sup>(72)</sup>の終息による、身心の軽快性である。〔そしてそれは、〕あらゆる障害<sup>(73)</sup>を除去する作用をもつ<sup>(74)</sup>。

「あらゆる障害を除去する」とは、それ（軽安）によって、所依の転換があるからであると理解されるべきである。

## 1.1.5.1.4.1.17 不放逸

【問】不放逸とは何か。【答】勤と無貪・無瞋・無痴をよりどころとしてから善なる諸法を修習することであり、有漏なる諸法から心を防御することである。〔そして、〕あらゆる世間的な〔完成〕と出世間的な完成を満たして円かにする作用をもつ<sup>(75)</sup>。

あらゆる善の修習は、勤などを前提にするものであるから、それら（修習）に対して「不放逸」と名付ける。「有漏なる諸法」とは、諸々の漏と、漏に相当する諸境のことであると、ここでは理解されるべきである。

<sup>(72)</sup> Edgerton [1953: 272] : *dauṣṭhūlya*, nt. (Pali *duṣṭhulla*; see s.v. *duṣṭhūla*), *gross wickedness, depravity* ....

<sup>(73)</sup> ここでの「障害」は煩惱障と所知障の二障を指すのか、あるいは煩惱障のみを指すのかについては検討の余地がある。PSkV 47.8–48.6 は「煩惱障など」と解説しているので二障と理解できるが、TrBh 7.21–22 に従えば煩惱障のみを指す。

<sup>(74)</sup> 他論書の軽安の定義は、BK-I 89–91、BK-II 77–79、BK-III 139–141、BK-IV 143–145、PSkV 47–48 参照。

<sup>(75)</sup> 他論書の不放逸の定義は、BK-I 92–94、BK-II 80–83、BK-III 142–145、BK-IV 146–149、PSkV 48–49 参照。

## 1.1.5.1.4.1.18 捨

【AS】 AS-Ms 3v4 (Gokhale 16.17–19) , ASVy-Ms 11v2–4 (Li [2016: 222.4–6]) , Cf. 早島 46.

Vy 11v3 upekṣā katamā. savīryakān alobhādveṣāmohān niśritya yā saṃkliṣṭavihāravairodhikī  
 cittasamatā cittaprasāṭhatā<sup>(76)</sup> cittasyānābhogāvasthitatā.<sup>(77)</sup> saṃkleśānavakāśasaṃniśraya-  
 Vy 11v4 dānakarmikā.  
 △

【ASBh】 ASBh-Ms 7r2–4 (Tatia 5.20–23) , ASVy-Ms 11v4–5 (Li [2016: 222.7–9]) , Cf. 早島 47.

Bh 7r3 **cittasamatādibhir** upekṣāyā ādimadhyāvasānāvasthā vyākhyātāḥ. tathā hy upekṣāyā  
 yuktaṃ cittaṃ<sup>(78)</sup> layādivaiṣamyābhāvād<sup>(79)</sup> āditaḥ **samam**. tato 'nabhisamskāreṇa<sup>(80)</sup>  
 vahanāt **praśaṭham**. tataḥ saṃkleśāsaṅkābhāvād **anābhogāvasthitam** iti.  
 △

## 1.1.5.1.4.1.19 不害

【AS】 AS-Ms 3v4 (Gokhale 16.19) , ASVy-Ms 11v5 (Li [2016: 222.10]) , Cf. 早島 46.

avihiṃsā katamā. adveṣāṃśikā<sup>(81)</sup> kāruṇyacittatā.<sup>(82)</sup> aviheṭhanakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 7r4 (Tatia 5.23–24) , ASVy-Ms 11v5–6 (Li [2016: 222.11]) , Cf. 早島 47.

Vy 11v6 **avihiṃsāpy** adveṣavyatirekāt prajñaptisatī veditavyā.  
 △

<sup>(76)</sup> cittasamatā cittaprasāṭhatā] AS-Ms, cittasamatāryaprasāṭhatā ASVy-Ms.

<sup>(77)</sup> cittasyānābhogāvasthitatā] AS-Ms, cittānābhogāvasthitatā ASVy-Ms.

<sup>(78)</sup> yuktaṃ cittaṃ] ASBh-Ms, yuktacittaṃ ASVy-Ms.

<sup>(79)</sup> layādivaiṣamyābhāvād] ASBh-Ms, layānādivaiṣamyābhāvād ASVy-Ms.

<sup>(80)</sup> 'nabhisamskāreṇa] ASBh-Ms, 'bhisamskāreṇa ASVy-Ms.

<sup>(81)</sup> adveṣāṃśikā] ASVy-Ms, adveṣaikāṃśikā AS-Ms.

<sup>(82)</sup> kāruṇyacittatā] ASVy-Ms, karuṇatā AS-Ms.



## 1.1.5.1.4.1.18 捨

【問】捨とは何か。【答】勤と無貪・無瞋・無癡をよりどころとして汚れた過ごし方と相反するものであって、心が平らであることであり、心が真直ぐであることであり、心を構えない状態である。〔そして、〕雑染に隙を与えないためのよりどころを提供する作用をもつ<sup>83)</sup>。

「心が平らであること」などによって、捨についての初め・中間・最後の段階が説明されている。すなわち、捨と結びついた心は、沈み込み（沈没）などという不安定さが無くなるから、まず初めに平らになる。次に、〔その心は〕造作なく〔三昧の状態へと〕運ばれるから、真直ぐになる。さらに、〔その心には〕雑染に対する懸念がなくなるから、構えない状態になる。

## 1.1.5.1.4.1.19 不害

【問】不害とは何か。【答】無瞋の一部であり、悲愍の心をもつことである。〔そして、有情を〕害さないという作用をもつ<sup>84)</sup>。

不害も無瞋とは別なものではないから、〔単なる〕名称上の存在（仮設有）であると理解されるべきである。

---

<sup>83)</sup> 他論書の捨の定義は、BK-I 75-76、BK-II 84-87、BK-III 119-123、BK-IV 122-125、PSkV 49-50 参照。

<sup>84)</sup> 他論書の不害の定義は、BK-I 87-88、BK-II 88-90、BK-IV 140-142、PSkV 50 参照。

## 略号および参考文献一覧

BK-I	Bauddhakośa, See 斎藤ほか [2011]
BK-II	Bauddhakośa, See 斎藤ほか [2014]
BK-III	Bauddhakośa, See 榎本ほか [2014]
BK-IV	Bauddhakośa, See 宮崎ほか [2017]
BK-V	Bauddhakośa, See 室寺ほか [2017]
Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
ins.	insert(s)
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	大正新脩大蔵経
Tib.	Tibetan translation
早島	早島本 (『梵蔵漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』), See AS.

## 一次資料

## 梵文

AAA	<i>Abhisamayālaṃkāralokā</i> . Ed. by Unrai Wogihara, <i>Abhisamayālaṃkāralokā Prajñāpāramitā-vyākhyā: The work of Haribhadra</i> , 7 Vols, 1932–35 (repr. Tokyo: The Toyo Bunko, 1973).
AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . Ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AKVy	<i>Abhidharmakośa-vyākhyā</i> . Ed. by Unrai Wogihara, <i>Sphuṭārthā Abhidharmakośa-vyākhyā by Yaśomitra</i> , Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1989. Reprint (First edition: Tokyo: The Publishing Association of the <i>Abhidharma-kośa-vyākhyā</i> , 1932–1936).
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . Ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the <i>Abhidharmasamuccaya</i> of Asaṅga,” <i>Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society</i> New Series Vol. 23, 1947, pp. 13–38. 早島 理 『梵蔵漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』』 3 卷, 瑜伽行思想研究会, 2003.

- Cf. ed. by P. Pradhan, *Abhidharma Samuccaya of Asanga*, Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950.  
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2013] [2014] [2015] , Li & Kano [2014] .)
- ASBh(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. Ed. by Nathmal Tatia, *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.  
See also AS (早島).  
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] , 佐久間 [1996] .)
- ASVy(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*. Tib. D (4054), P (5555).  
See also AS (早島).  
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] , Li & Kano [2014] .)
- Avś *Avadānaśataka*. Ed. by P. L. Vaidya, *Avadānaśataka*, Buddhist Sanskrit Texts No. 19, Darbhanga: Mithila Institute, 1958.
- MN *Majjhima Nikāya*. Ed. by Robert. Chalmers, *The Majjhima-Nikāya*, London: The Pali Text Society, Vol II, 1896.
- MSA *Mahāyānasūtrālaṅkāra*. See MSABh.
- MSABh *Mahāyānasūtrālaṅkāra-bhāṣya*. Ed. by Sylvain Lévi, *Mahāyānasūtrālaṅkāra : exposé de la doctrine du Grand Véhicule : selon le système Yogācāra*, tome I, Paris: Librairie Honoré Champion, 1907 (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).
- PSk *Pañcaskandhaka*. Ed. by Li Xuezhong and Ernst Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Beijing: China Tibetology publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSkV *Pañcaskandhaka-vibhāṣā*. Ed. by Jowita Kramer, *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
- TrBh *Triṃśikā-bhāṣya*. Ed. by Sylvain Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi : deux traités de Vasubandhu : Viṃśatikā (La vingtaine) accompagnée d'une explication en prose et Triṃśikā (La trentaine) avec le commentaire de Sthiramati*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.  
Ed. by Hartmut Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.
- YBh *Yogācārabhūmi*. Ed. by Vidhushekhara Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: the Sanskrit text compared with the Tibetan version*, part 1, Calcutta: The University of Calcutta, 1957.

- ŚrBh<sub>1,2</sub>      *Śrāvakabhūmi*. 1 = 声聞地研究会 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処 —サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第4巻, 山喜房佛書林, 1998. 2 = 声聞地研究会 『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処 付 非三摩呬多地・聞所成地・思所成地 —サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第18巻, 山喜房佛書林, 2007.
- BBh      *Bodhisattvabhūmi*. Ed. by Unrai Wogihara, *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Tokyo: Seigo Kenkyukai, 1930–1936 (repr. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1971).

## 漢訳

- 『顕揚論』      『顕揚聖教論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1603).  
 『集論』      『大乘阿毘達磨集論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605).  
 『雜集論』      『大乘阿毘達磨雜集論』 安慧菩薩糝, 玄奘訳. T [31] (1606).

二次資料  
(欧文)

- Edgerton, Franklin  
 [1953]      *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven: Yale University Press.
- van der Kuijp, Leonard W. J.  
 [2013]      “Notes on Jñānamitra’s Commentary on the Abhidharmasamuccaya,” *The Foundation of Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. Ulrich Timme Kragh, Harvard Oriental Series Vol. LXXV, Cambridge: Harvard University Press, pp. 1388–1429.
- Li, Xuezhū 李学竹  
 [2013]      “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* (= ARIRIAB) Vol. XVI, pp. 241–253.  
 [2014]      “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” ARIRIAB Vol. XVII, pp. 195–205.  
 [2015]      “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” ARIRIAB Vol. XVIII, pp. 275–283.

[2016] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharma-samuccaya-vyākhyā* —Folios 8v4–18r1—,” ARIRIAB Vol. XIX, pp. 217–231.

Li, Xuezhun 李学竹 & Kano, Kazuo 加納 和雄

[2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharma-samuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.

Lamotte, Étienne

[1938] *La somme du grand véhicule d’Asaṅga (Mahāyānaśāstra)*, tome II, Louvain: Université de Louvain (repr. 1973).

Lévi, Sylvain

[1911] *Mahāyānasūtrāṅkāra : exposé de la doctrine du Grand Véhicule : selon le système Yogācāra*, tome II, Paris: Librairie Honoré Champion (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).

## (和文)

阿毘達磨集論研究会

[2015] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)」『インド学チベット学研究』19, pp. 57–96.

[2016] 「梵文和訳『阿毘達磨雜集論』—安慧による冒頭偈—」『インド学チベット学研究』20, pp. 24–52.

榎本 文雄 ほか

[2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— バウツダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林.

斎藤 明 ほか

[2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 —仏教用語の用例集 (バウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林.

[2014] 『瑜伽行派の五位百法 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— バウツダコーシャ II』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林.

佐久間 秀範

[1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林.

菅原 泰典

[2010] 『修所成地の研究 II』私家版.

高崎 直道

- [1964] 「如来蔵説における信の構造」『駒澤大学仏教学部研究紀要』22, pp. 86-109.  
 (再録 2010 年: 「如来蔵説における信の構造」『高崎直道著作集第六巻 如来蔵思想・仏性論 I』春秋社, pp. 339-374.)

瀧川 郁久

- [2008] 「スティラマティによる触の解釈」『印度学仏教学研究』57-1, pp. 207-212.

長尾 雅人

- [1982] 『撰大乘論 和訳と注解 上』講談社.  
 [1987] 『撰大乘論 和訳と注解 下』講談社.  
 [2009] 『『大乘莊嚴經論』和訳と注解 —長尾雅人研究ノート(3)—』長尾文庫.

パウツダコーシャ・プロジェクトチーム

- [2014] 「śraddhā/saddhā の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』17 号, 東京大学仏教青年会.  
 [2017] 「prajñā/paññā の訳語をめぐって」『仏教文化研究論集』18・19 号, 東京大学仏教青年会.

袴谷 憲昭

- [1992] 「如来蔵説と唯識説における信の構造」『仏教思想 11 信』平楽寺書店, pp. 199-229.  
 (再録 2008 年: 「如来蔵説と唯識説における信の構造」『唯識文献研究』大蔵出版, pp. 550-575.)

宮崎 泉 ほか

- [2017] 『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウツダコーシャ IV』インド学仏教学叢書 20, 山喜房佛書林.

室寺 義仁 ほか

- [2017] 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウツダコーシャ V』インド学仏教学叢書 21, 山喜房佛書林.

## Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (2)

### Summary

This paper is a continuation of "Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (1)", and intends to rerevise the Sanskrit texts of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya*, and make a Japanese translation of them. It is due to two major points, the one is that no complete Japanese translation of either text has been published so far, the other is that some damaged parts in the extant manuscript of the *Abhidharmasamuccaya* can be recovered from a newly discovered Sanskrit manuscript.

On the latter point, we greatly rely on the Sanskrit manuscript of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* (ASVy) detected by Li Xuezhū, which includes the nearly full texts of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya*. We separately published the Sanskrit text and Japanese translation of the beginning part of the ASVy which consists of the opening verses and its annotations.

This paper gives translation from the establishment (*vyavasthiti*) of the *vedanā* to the half of the establishment of *saṃskāra* in the first *tridharma* chapter of the first part, *i.e.* the *maula* part. In the establishment of the *saṃskāra*, the *caitasikadharmas* are enumerated and defined in terms of their characteristics (*lakṣaṇa*) and functions (*karman*).

The translation was done by Abhidharmasamuccaya Study Group; Yoshihiko Nasu prepared a working translation and annotations, then Kazuo Kano and all other members examined and revised them. Li Xuezhū gave us a full cooperation in editing and revising the Sanskrit texts included in this paper.

- Leader: Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)  
 Members: Kazuo Kano (Komazawa University)  
 Li Xuezhū (China Tibetology Research Center)  
 Akira Yoshida (Ryukoku University)  
 Shun'ei Matsushita (Otani University)  
 Satoshi Hayashima (Ryukoku University)  
 Yuki Takatsukasa (Kyoto University)  
 Takeshi Yokoyama (International College for Postgraduate Buddhist Studies)  
 Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)  
 Takanori Fukita (Bukkyo University)  
 Hironori Tanaka (Bukkyo University)  
 Minori Okuno (Ryukoku University)

(Synopsis)

#### 1.1.5.1.2 Establishment of the *vedanāskandha*

- 1.1.5.1.3 Establishment of the *saṃjñāskandha*
- 1.1.5.1.4 Establishment of the *saṃskāraskandha*
  - 1.1.5.1.4.1 *caitasikā dharmāḥ* commencing with *cetanā* (other than *vedanā* and *saṃjñā*)
    - 1.1.5.1.4.1.1 *cetanā*
    - 1.1.5.1.4.1.2 *manaskāra*
    - 1.1.5.1.4.1.3 *sparśa*
    - 1.1.5.1.4.1.4 *chanda*
    - 1.1.5.1.4.1.5 *adhimokṣa*
    - 1.1.5.1.4.1.6 *smṛti*
    - 1.1.5.1.4.1.7 *samādhi*
    - 1.1.5.1.4.1.8 *prajñā*
    - 1.1.5.1.4.1.9 *śraddhā*
    - 1.1.5.1.4.1.10–13 *hrī, apatrāpya, alobha, adveṣa*
    - 1.1.5.1.4.1.14 *amoha*
    - 1.1.5.1.4.1.15 *vīrya*
    - 1.1.5.1.4.1.16 *praśrabdhi*
    - 1.1.5.1.4.1.17 *apramāda*
    - 1.1.5.1.4.1.18 *upekṣā*
    - 1.1.5.1.4.1.19 *avihimsā*

キーワード *Abhidharmasamuccaya*、『阿毘達磨集論』、『阿毘達磨雜集論』、無着、安慧